週刊ダイヤモンド　書林探索
北村行伸
平成 20 年 9 月 9 日号

「議論好きなインド人—対話と異端の歴史が紡ぐ多文化世界」

アマルティア・セン（著）佐藤宏・栗屋利江（訳）
明石書店　2008年7月5日刊

本書は1998年にノーベル経済学賞を受賞したセン教授によるインド人やインド社会に関する論文集である。セン教授は経済学者ではあるが、その論考は哲学や思想史、文化にまで及ぶことはよく知られている。本書からは、セン教授がインドの歴史や思想、宗教を、自由な議論を認める多元主義、教条や迷信、偏狭なアイデンティティに惑わされない理性主義の立場から問い直している姿が浮かび上がってくる。

インド・ブームで巷に出回っているインド論によく見られるヒンドゥー至上主義に基づく価値観の押しつけを徹底的に否定し、その豊饒かつ混沌としたインドの多元性を肯定的に描くことで、インドにおける自由と民主主義の伝統がギリシャ時代以来の西洋の伝統に勝るとも劣らぬ形で根付いていたことを饒舌かつ実証的に論じている。

セン教授は、インドの知識階級の生み出した現存する最も良質な学者、思想家であると評価しても過言ではないだろう。インドのみならず、世界の経済や民主主義の発展、人間の安全保障という現実的な政策面での影響力は今も拡大を続けている。

セン教授は30代よりインドを離れ、ロンドン大学やオックスフォード大学、ハーバード大学で教鞭をとりながら、20世紀最高の知性バーリン、ロールズ、ノジック、ドゥオーキン、アローらと交流を深め、彼らとの議論に刺激されて、新しい研究領域を開拓し、社会的問題意識を高めていった。そのためにインドを離れ世界の最高学府で仕事をしてきたことは当然の成り行きであったと言えよう。しかし、インドを離れていてもインドの現実に関わることをやめることなく、またインド国籍をかたくなに保持し、インドの問題を自らの問題として問い続けてきた愛国者でもある。

日本にも多くの知己を持ち、本書でも日本の民主主義の伝統を明治維新からではなく、聖徳太子の17条憲法から説き起こす中村元の議論を引用するような知日家である。訳知り顔で日本経済にコメントしながら、実は日本の歴史や思想に関して無知な経済学者とは全く異次元の思想家であることを本書から実感していただきたい。